

ガラテヤ人への手紙1章1-5節 「福音だけで生きる」

1A ガラテヤ書の背景と概要

1B パウロの宣教旅行

1C 追従する偽教師

2C 冷めた愛

2B 三つの区分

2A 挨拶 1-5

1B 人によらない使徒職 1

2B すべての兄弟たち 2

3B 恵みと平安 3-5

1C 父なる神と主イエス・キリスト 3

2C ご自身をお捨てになった方 4

3C 神の栄光 5

本文

ガラテヤ書を開いてください、私たちはこれからガラテヤ書をじっくりと見ていきたいと思っています。まず初めに、ここの恵比寿の学び会でガラテヤ書を読むことを選んだ理由をお話します。直接的には、ローマ人への手紙の学びを、成増バイブルスタディで学んでいるからです。ローマ人への手紙は、キリスト教の信じている教えが最も体系的に書かれているところと言っても過言ではありません。信仰による義、律法の行ないではなく、キリストが私たちの罪のために死んでくださったという神の恵みによって救われるのだという福音です。これが、私たちの魂に対する基礎手術だとします。ガラテヤ書は、「最先端のがん治療」と呼んで良いかもしれません。私たちの体に忍び込む恐ろしい癌細胞を、ある専門家が執刀して切除するように、神が私たちを救われるのに、その福音の種類をいつのまにか全く異質なものに取り替えてしまうという、最も福音にとって危険な異端を真正面から取り扱っています。

今日の学びの主題、今日の学びを題するなら「福音だけで生きる」ということです。キリストが私たちの罪のために死なれ、三日目に甦られたということ。この福音が、私たちの生活のあらゆる領域でその通りであり、私はこの福音によって確かに生きてると本当に、確実に言えているか？ということ。そうではなく、あらゆる生活の領域に及ばずに、いつの間にかこの世の教えに頼っています。そしてこの世の教えというのは、全てが「自分の力や努力、知恵によって救いを達成する」ということに基づいています。したがって、キリストの福音にさらに何かを付け加えて、それで救いを達成するという異端が生まれるのです。イエス・キリストを信じるというだけでは不足だ、他の何かを付け加えないと、人は十全にならない、すなわち救われないと考えるのです。

そして、最も危険なのは、それが熱心や聖書知識と合わせて語られることです。パウロが対決しているのは、そうしたユダヤ主義者でした。律法を掲げながら、律法の性質や目的としているものからかけ離れた偽りの教えを唱えていました。イエス様が最も厳しく対峙されたのは、とんでもない罪を犯していた遊女や取税人ではなく、律法学者であり、律法に厳格なパリサイ派でした。ですから、全く別の宗教であれば、それは区別が付きませんが、むしろ聖書に関する事、教会に関する事がらを使って、福音の本質を変えてしまうということで、最も危険と言えます。がん細胞も元々は癌ではなかったのですが、全てが調和して生きている細胞が自分だけが動くと宣言して、それで癌になります。ですから、福音によって初めて、いろいろな良き物が出てくるのですが、その良き物が独り歩きする時、それは福音そのものを変えてしまう恐ろしい力を持っています。

このような異端に引きこまれると、熱心にはなっている、形はしっかりしているのですが、実が結ばれていません。救われた時の喜びや愛が、消えています。心が冷えてしまっているからです。他にいろいろなことをやり始めて、それは生きがいを持たせるものかもしれませんが、実は真実な喜び、真実な愛、また心の平安はなくなってしまうのです。しかし、形や見た目ものは継続してあるので、そこから抜け出すことは極めて難しくなります。奴隷状態になるのです。ですから、ガラテヤ書に書かれている異端は、何もエホバの証人、モルモン教のような有名なものに限りません。巷で、クリスチャンたちの間で交わされている会話の中にも、そのような偽りの教えがじわじわと忍び込む類いのものであります。

1A ガラテヤ書の背景と概要

1B パウロの宣教旅行

ガラテヤ書についての背景を説明しましょう。パウロの宣教旅行の地図をまずは、ご覧ください。そこに「ガラテヤ」という地域が、今のトルコ、当時の小アジアの地域にあります。紀元前三世紀に、ヨーロッパから侵入したガリア人がここを支配しました。それでガラテヤと名づけられています。ですからここは、ローマ、コリント、エペソ、ピリピ、コロサイというような町ではなく、一つの地域にある諸教会に宛てた手紙です。

パウロが、シリアのアンティオケ（今はトルコ領にあります）にある教会で、聖霊によってバルナバと共に宣教に遣わされました。キプロス島に渡り、それから小アジアに向かいます。そこでそおらくはマリラヤに雇ったか何かで彼の視力が弱くなったと考えられます。けれども、彼は宣教の働きをして、ピンデヤのアンティオケで会堂に入り福音を伝え、迫害を受けながらも、イエス様を信じる人々が起こされました。そして、イコニオム、ルステラへと進みます。ルステラで石打ちに会い、死にかけましたが彼は立ち上がって、福音を続けて宣べ伝えました。そしてデルベに行き、そして元来た道を引き返して、アタリヤからシリアのアンティオケに戻ります。彼はアンティオケから第二の宣教旅行、第三の宣教旅行をしますが、その町々を通りながら進んでいます。したがって、このガリラヤ南部の地域は、パウロが初めに福音を伝えたところであり、また続けて彼らを教え、励ます、フォローアップしているところでありました。その第一回目の宣教旅行は、13-14章に書き

記されています。

1C 追従する偽教師

ところが、パウロの福音宣教の働きの後に、その後に来て、偽教師たちが入り込んで来たのです。第一回目の宣教旅行の後のことでしょう、彼らはやって来て、大体こんなことを言っていました。「パウロは、実は自分勝手に活動しているんです。自分独自の教えを振り回していますが、エルサレムとのつながりはないのです。私たちはエルサレムから来ました、そこにいる主だった人たち、ヤコブ、ペテロ、ヨハネから遣わされている者たちです。パウロの伝える福音には、欠けがありません。イエス・キリストを信じるだけではないのです。そんな単純なものではないでしょう。神の国というものには、ユダヤ人への約束があるのです。律法によって神は御国を建てられます。したがって、まずは契約の民になるために割礼を受けましょう。そして、パウロは律法を軽視して、罪を犯させるようなことを奨励していますが、そうではなくしっかりと律法を守って、救いを達成するのです。」こうやって、パウロへの信頼を引き落とすことによって、自分たちに引き寄せようとしています。

2C 冷めた愛

そのことによって、ガリラヤの信者たちは、イエスへの信仰だけでなく、律法を守らなければいけないのだと信じました。割礼を受け、安息日や祭り、食事の規定などを守るようになっていきました。それは規則に守られているので、安心するでしょう。「ただイエス様を仰ぎ見ればよい。御霊に導かれ、キリストの愛に留まっています。」と言われると自由裁量があまりにも多すぎます。「これについては、どうすればよいですか。」と尋ねられる時に、「自分で考えて祈って、決めてください。」という回答をもらっても、どうすればよいか分かりませんね。けれども、新しい教えには、それが明確に示されています。だから、ある意味で楽ですが、自分がイエス様に向く時の、その肉との葛藤を経ません。自分を主の前に出して、自分に対して死に、けれども神の恵みが溢れてくる、その体験なしに生きられます。形だけがあり、中身がない枠組みの中での奴隷となっていきます。そのような形で、パウロから心が離れ、愛が冷えてしまった彼らに対して、どうすればよいのか悩んでいる、彼らを見放していないパウロの姿を読むことができます。

ところで、パウロはこの偽教師たちとの対決の様子は、使徒の働き 15 章で読むことができます。第一次宣教旅行の後、アンティオケの教会にいた時に偽教師たちがやって来て、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われぬ。」と言いました。それでパウロやバルナバと激しい対立と論争になり、そのままこの問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに戻ることになりました。そして、エルサレムの会議が開かれ、ペテロも、またヤコブも、パウロの宣べ伝えている恵みの福音こそが、私たちの信じていることだ、これが聖書に書かれていることだとして、聖霊によって、異邦人に重荷を負わせないという決議をしたのです。ガラテヤ書は、このエルサレム会議の直前に書いたものではないかと言われています。紀元後 50 年前後に書かれたものということです。

ですから私たちの持っている新約聖書というのは、悪意を持っている人からは、「パウロ路線」の書物だと言ってもよいでしょう。偽教師たちにとっては、「イエスの教えから、パウロ神学によって逸脱した。」と言って、「イエス教パウロ派の教えなのだ。」としていることでしょう。時々、神に立ち帰って真っ当なクリスチャン生活を取り戻した人に対して、そうではない人々が後ろで囁きます。「あの人は、結局、あの指導者の方に付いていくのね。」という声を聞きます。けれども、神の福音に立ち帰っているか、それとも人の教え、この世の教えの中に留まっているかのどちらかしかありません。

2B 三つの区分

ガラテヤ書には、三つの流れがあります。一つは、パウロの使徒職です。1章と2章に書いてあります。パウロの使徒職について、疑いの目を持っていたからです。誰に付いているのかというのが使徒職を決めるのではなく、神から来ているものなのだとことを話していきます。次に、信仰だけによる救いであり、律法ではないのだという、教え、教理を取り組んでいきます。それが3章と4章です。そして、「あなたがたは、再び奴隷状態に戻らないでください。」という懇願、肉に対しては御霊に導かれなさいという勧めを行ないます。つまり実践です。それが5-6章です。

2A 挨拶 1-5

それでは1章の挨拶の部分を読みます。ここからも、他の手紙とは大きな違いが出てきます。本質的なこと、根本的なことを挨拶の中に含んで、非常に短く挨拶しています。そして本題へと6節に入りますが、なぜかと言うと、パウロの挨拶は、キリスト者としての愛の交わり、親しみを表すものですが、それが無くなってしまっているという危機的状況にあるからです。決して彼らを断罪していないけれども、とても深刻なことであることを手紙全体で書いています。4章の12節でようやく、彼らへの思いと感情を書いています。彼らがパウロから心が離れたことを告げています。これが無くなったので、挨拶言葉も本当に少なくなっているのです。

1B 人によらない使徒職 1

1 使徒となったパウロ・・・私が使徒となったのは、人間から出たことでなく、また人間の手を通したことでなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によったのです・・・

パウロは注意深く、自分が使徒となったのは、人間から出たことでなく、人間の手を通したことでもない、と言っています。パウロは1章において、このことを何回も繰り返しています。使徒となったのは人による任命ではない。また、私が宣べ伝えている福音は、人によって教えられたのではなく、イエス・キリストの啓示である。私が宣べ伝えている福音は、神ご自身から来たものであり、キリストご自身のことばである、と言うことです。しかし偽教師たちは、エルサレムの教会とのつながりを強調しました。けれども、実際は、つながりはなく勝手に彼らがそう言っていたのですが・・・あなたがたがこのつながりの中にいなければ、救いを得ることはできない。あなたがたは、エルサ

レムで教えを受けたこの私たちの教えを受けることによって、初めて信仰を保つことができる、と教えていました。そこでパウロは、人からの任命は本質的な事柄ではない。大切なのは、イエス・キリストご自身と父なる神ご自身からの任命であるということです。

ですから、パウロが宣べ伝えていた福音は、人間の鎖の中につながれていたものではありませんでした。そうではなく、神ご自身につながれていた福音です。神がキリストにおいて成してくださったこと、そのことに縛られているところの福音宣教です。これが本物の召しであり、私たちが求めなければいけない召しです。「ローマ 8:30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」したがって、私たちの資質は、キリストに呼ばれたという意識や確信がどれだけあるでしょうか？誰々さんによって、私はこうやっています、というのではなく、神がキリストにおいてしてくださったことを、いかに自分のものとして受けとめているかであります。人からの教えではなく、キリストが確かに私を教えたのだという確信です。

しかし、もちろんこれはたった独りでいることを意味しているのでは、全くありません。むしろ、同じ召しを与えられているので、一つになる、一つ体になっています。「あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。(エペソ 4:4)」自分独りでキリストを礼拝できるのだと考えている人は、その召し自体を疑ったほうがよいです。健全な召し、救いの確信は、もっぱらキリストによって呼ばれていることがあります。それと同時に、そのように召された者たちが一つになっていることがあります。

そして、救いのための召し、一つ体になる召しがあり、それぞれの任務の召しがあります。「そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行なう者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者などです。(1コリント 12:28)」第一に使徒となっています。これは重要なことで、キリストの権威が与えられている、つまり彼らの語ることがキリストから直接来た教えであるというところの権威です。そのために、第一となっています。パウロは、そうした使徒であるとの弁明をしています。

そして、パウロは自分の語っている神が、どのような神かを定義しています。「イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神」と言っています。イエス・キリストであられ、イエス・キリストの父であられる方です。この方は、キリストを死者の中から甦らせました。ここが大事です。パウロの語っている福音は、イエスを神が死者の中から甦らせたという所にあります。ガラテヤの諸教会における偽りの教えは、律法の行ないによって今の不足を補うのだ、神の御心を達成するのだと教えていました。違います、肉の弱さに対して必要なのは、肉の努力ではなく、復活の神への信仰なのです。「コロサイ 2:12 あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。」死者を甦らせる神なのです、復活の主なのです。暗闇の中に光として

輝かれる方です。この方に望みを置き、この方を信じるのです。

2B すべての兄弟たち 2

2 および私とともにいるすべての兄弟たちから、ガラテヤの諸教会へ。

送り手がパウロですが、受け手はここにあるように、ガリラヤの諸教会であります。ここで大事なものは、「私とともにいるすべての兄弟たちから」という言葉であります。パウロは、自分がことさらに自分の主張している恵みの福音を他の人々に強いることがなくても、それでもすべての兄弟がパウロの福音を分かち合っていました。共有していました。殊更に語らずとも、主がそれぞれの一つの福音を教えています。ここが肉による教えとの違いです。御霊の賜物として人に教えますが、それは大事ですが、前提として聖霊の油注ぎがそれぞれに与えられています。だから殊更に、「この人の教えに付いていきなさい。」と言わなくてもよいのです。

そしてガラテヤの諸教会へ手紙を送っていますが、パウロはその教会は自分で開拓したところでは、激しい迫害を受けました。多くの労苦がありました。しかし偽教師たちは、自分で開拓すればよいのに、それはせず、すでに建て上げられている人のところに行き、その建て上げた人を引き落とすことによって自分たちに引き寄せようとしていました。偽教師たちは、決して自分たちで伝えることはできません。なぜなら、まず召しが無いということ。それから、迫害を恐れているからです。だから、人が開拓した土俵で相撲を取り、かつ開拓した人々を叩きます。こうした肉の働きは、どこでも起こります。新しく信じた人、まだ信仰の定かでない人のところに行き、自分のところに引き寄せます。その人は建て上げられることなく、むしろ信仰から離れていきます。

3B 恵みと平安 3-5

1C 父なる神と主イエス・キリスト 3

3 どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。

パウロのいつもの挨拶です。「恵みと平安」です。恵みの元々の意味は、「自分の功德によって得たのではない、好意」であります。神からよく思われるのに、自分のほうで何もしていない、いや、嫌なことをしたのに、一方的に神がそのご性質から良く思っていてくださっているということです。これが恵みであり、具体的には、罪の赦しがあります。ですから、恵みがあつて平安があります。平安を壊す最も大きな原因は、贖われていない自分、罪の赦しを受けていない自分の良心であります。罪の赦しを受けていないので、それで何とかして自分で自分を贖おうとしています。自分を取り戻そうとしています。それで平安がありません。しかし、一方的な神の好意によって、罪を赦してくださいという恵みを受け入れる時に全てが変わります。そして全ての良きものは、この平安から出てきます。

そして「私たちの父なる神と主イエス・キリスト」という言葉が大事ですね。これは、一つにキリストの仲介がなければ、神を知ることはできないことを表しています。神を知ろうとしても、私たちの頭の限界では思い計ることはできません。しかし、キリストによって知ります。それも自分の頭で判断するのではなく、ただ出会いによって、神を知ることができます。そしてもう一つは、父なる神とキリストは一つだということです。恵みと平安が、神とキリストという一体になったところから出ているということです。キリストが神ではないという異端の教えからは、恵みは出てきません。

2C ご自身をお捨てになった方 4

4 キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです。

恵みと平安の挨拶に引き続き、キリストの働きから始まります。恵みは全て、神からの率先の働きです。キリストが何をされたかに始まります。私たちが何かをして、それで成り立つものはすべて、律法の行ないの範疇に入ります。神が行われたことに立脚します。

「キリストは今の悪の世界から私たちを救い出そうとして」と書いてあります。これは、神の恵みの目的です。何のためにキリストが恵みを注いでくださったのか。これは、私たちが今の悪い世界から救い出されるためです。「今の悪の世界」と私たちがどれだけ認識しているでしょうか？この世は悪い者に支配されていると、ヨハネ第一の最後には書かれています。もちろん、主が良き物で世界を満たしておられます。しかし、その良き物も、アダムが罪を犯した時以来、罪の影響を免れていません。だからキリストにあつて全て良き物へと回復できます。それなのに、この世界には何か良いものがあるはずだと、キリスト抜きで良き物を探そうとする時に何か悪くなります。

そして、「私たちを救い出そうとして」とありますが、私たちは今の世界に生きながらにして、この世界に属していません。キリストに属しているので、世から聖め別たれた者です。そして、今の世は滅びます。主が滅ぼされます。その前に主は私たちを救い出されます。主は教会のために天から降りて来られて、教会は空中にまで引き上げられ、それから主は御怒りを地上に下されます。

そして、「私たちの罪のために」とあります。これは恵みの理由です。なぜ神の恵みが私たちの上に注がれたか、それは、私たちが罪を犯したからです。他の人ではなく、紛れもなく自分自身が罪を犯したという責任であります。いつまでも他の人々を見ている、他の環境を見ている、これであればその人は、福音を知りません。あまりにも多くの人が、神と自分との間に何か理由を付けます。その間に何かを入れている限り、その人は福音を知りません。

ところで「恵み」という言葉はいろいろな意味で使われますが、例えば、良い天気にも恵まれたとか言います。しかし、聖書における恵みは、罪を犯したことに関わります。罪を犯したのにも関わらず、死ではなく永遠のいのちを持つところに現われます。罪を犯せば、その報いは死です。しかし、

神は、その罪によって永遠のいのちをもたらすところのみわざを行なってくださいましたのです。私たちは、自分の行ないで何とかして事を行なおうとする時、必ず罪を軽くみなしています。「いや、罪を重くみなしているから、自分で一生懸命努力しているのだ。」と言います。いいえ、自分で何とかできているのは、それだけ罪の重さをしらないのです。罪は、血を流すことなくして赦されません。聖なる神の前に、自分自身の血はもちろんのこと、犠牲の動物の血でさえ取り除くことはできないのです。そうではなく、御ご自身の血でのみ取り除くことのできる類いのものなのです。

そして、「ご自分をお捨てになりました」とあります。これは恵みの手段です。どのようにして、罪によって人に永遠のいのちをもたらすのか。罪キリストが身代わりに私たちの罪に対して死んでくださったからです。良い行いによって罪滅ぼしはできません。そして、キリストが何か他の方法で私たちの罪を取り除かれたのではなりません。ご自身を指し出されたのです。ご自身を神に対して罪の供え物とされたのです。このとてつもない大きな愛こそが、私たちを変えます。他に何か不足でもあるかのように、それ以外のところに求めていかせようとしたのが偽教師でありました。いいえ、この方ご自身が捧げられたというところにある神の愛こそが、私たちを罪から救うのです。

そして、「私たちの神であり父である方のみこころによったのです。」とありますが、これは、恵みの計画です。これらの恵みのわざをキリストが行なわれたのは、前もって父なる神がお定めになったことでした。ユダヤ人の指導者たちの陰謀によって、キリストは死に渡されたのですが、実は、神は天地が創造される前から、このことを永遠の贖いのみわざとしてお定めになっていました。このことを知らない人は、救われていません。統一協会では、十字架は失敗であったと教えます。いいえ、その失敗に見えるようなこと、その弱さの中にこそ、神の強さ、神の賢さがあります。神のご計画に自分の全てを任せることこそ、福音の恵みの中にあずかることができます。

3C 神の栄光 5

5 どうか、この神に栄光がとこしえにありますように。アーメン。

これは恵みの目標です。恵みが注がれたのは、人にではなく、神ご自身に栄光が帰されるようになるためです。もし私たちの功績によって、何かを成し遂げたのであれば、その栄光は私たちに帰されることとなります。証しと称するこのような自慢話が、キリスト教会の中でまかりとおっています。これだけの聖書理解が与えられました。これだけの祈りをしたから、こうなりました。聖霊のバプテスマを受けました。教会の人数がふえました。あの人は、こんなにささげています、など、人の功績がたたえられているのです。しかし、それは恵みではありません。神は、あえて称賛を受けるに値しない者、いや、罰を受けるに値する者をあえて引き上げ、そして義の冠をかぶせるようにしていただきます。それによって、だれにも栄光が帰せられず、ご自身のみがほめたたえられるように仕向けられたのです。

次回はこの恵みから引き離れた別の福音についてパウロが話し始めます。